

白山山系北部地域のニホンザルの記録

上馬 康生 石川県白山自然保護センター

WILD JAPANESE MONKEYS (*MACACA FUSCATA*) IN THE NORTHERN AREA OF THE HAKUSAN MOUNTAIN RANGE

Yasuo UEUMA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

はじめに

白山地域のニホンザルの分布や個体数については、手取川の中流域、尾添川水系及び瀬波川水系については、かなり詳しく調べられている(滝澤ほか, 1997など)。また、石川県全体の分布や過去の生息状況については水野(1984)の報告がある。また、古くは岩野(1974)が発表した、長谷部の調査による大正年代の記録がある。しかしながら、白山地域の北端地域、たとえば金沢市犀川上流域などについては、詳細は不明で、最近ようやく1群の構成が明らかにされたばかりである(滝澤ほか, 1998)。

筆者は、1970年代からこの山域に、鳥類調査、登山等で何度も入山しており、ニホンザルを目撃したり、その糞を記録してきた。また、1990年から1994年にかけては、ニホンザルの調査を目的に入山し、糞や食痕等を記録した。ここではその他に、登山者などから情報を得たものを含め、整理するとともに若干の考察を加えた。

表にあげた情報提供者および富山県の情報を教示いただいた赤座久明氏に感謝の意を表します。

調査地域及び調査方法

今回の調査で記録をまとめた地域は、水系からは石川県側に犀川、直海谷川、浅野川、森下川、また富山県側では小矢部川、境川などがあるところである。ここでは、これら水系の上流域に当たる山域を、白山山系北部地域と呼ぶことにする。ただし、前記のように、すでに群れがいることが報告されている瀬波川、雄谷については含めていない。

この地域は、標高約1,000m前後から約1,800mの山々が連なり、石川・富山県境をなしている。地形は全般に急峻で、深く切れ込んだ谷が数多く入り込んでいる。冬期の降雪量は非常に多く、その雪が6~7月頃まで各谷の中に残っている。植生は、チシマザサ・ブナ群団、自然低木群落、山地高茎草原、ササ自然草原が主要なものであり、標高の高いとこ

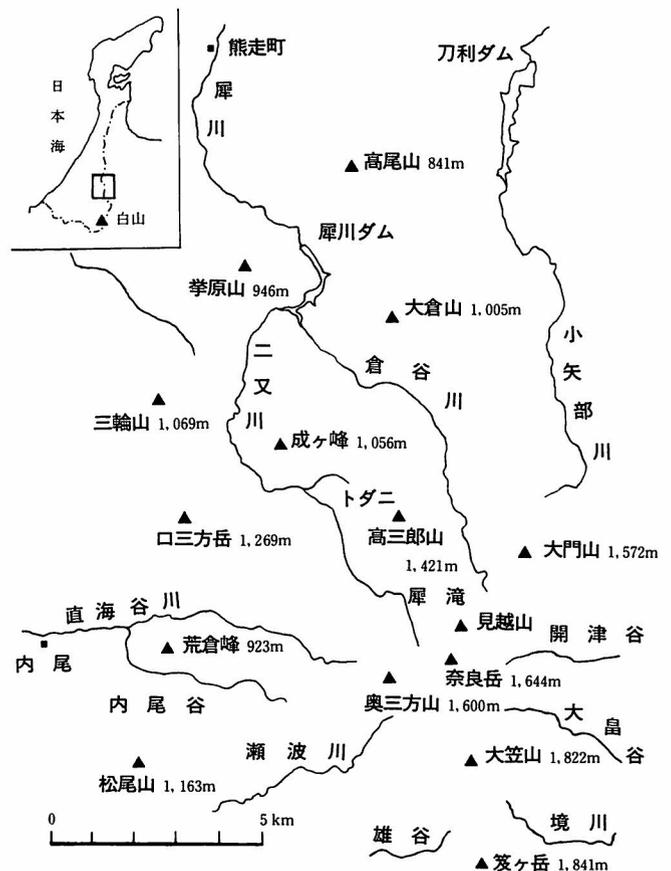


図1 調査場所

ろには、ササダケカンバ群落、オオシラビソダケカンバ群落、亜高山・高山高茎草原が一部ある。人為環境はほとんどなく、一部に登山道があるが入山者は少ない。谷の下流域の標高約300~400mには犀川ダム、境川ダム、刀利ダムがあり、さらに下ったところに小集落がある(図1)。

筆者が一年を通じて入山し、目撃、糞、足跡等によりニホンザルを確認をしたものの他、報告書、新聞等の文献、および登山者からの聞き取りなどによって情報を集めた。

調査結果と考察

1 群れの記録場所

1971年から1998年までに表のように29例の記録が得られた。一部推定を含め場所を示すと図2のようになる。

タカサブロウ群

この中でNo.3~7, 12は記録場所および年代から同じ群れのものと考えられる。高三郎山の山頂北西部に当たり、標高1,000m前後のところである。これらはすべて、5月下旬から8月下旬に記録されていることから、この群れは、付近を夏期の生息場所としていと考えられる。水野(1984)の報告で、タカサブロウ群とされた群れである。なお、No.24も、年代は違うものの場所的に同じ群れの可能性が高い。環境的にはブナ帯の急斜面で、尾根筋にブナ、ミズナラ、ヒノキなどがあり、斜面は山地高茎草原、低木林となっている。また露岩地も多い。人の出入りは5月ころの登山、山菜取りがあるが、アプローチに時間がかかることや地形的に険しいこともあって、ごく少数に限られている。

高尾山・医王山の群れ

No.9~11は、3シーズンにわたって、高尾山の尾根筋と付近の斜面の同じところに、冬期にみられているのが特徴であり、同じ群れの可能性がある。ただし、季節的なものか、周年の生息場所かは分からない。図には表せなかったNo.13と14も、小群ではあるが場所的に近く、同じ群れの可能性がある。今回の記録の中では最も北に位置し、医王山の北部の谷の中である。これも、3~4月の初めの記録であり、季節的な生息地かもしれない。これら2つの小群とみられる群れの、夏期の生息場所がどこであるか興味を持たれる。

ナラダケ群

次に、No.17, 19, 21, 22は同じ群れの可能性が高い。犀川の本流である二又川の源流部に当たり、残雪で埋まった谷の中の、標高1,250m, 1,400m, 1,620mの斜面の高茎草原に生えているシシウドやオニシモツケ、ウドなどの若草に食痕があった。また二又川の最源流部の尾根でオトナザルを目撃したり、新しい糞を数か所で確認している。植生的には、チシマザサーブナ群団、自然低木群落、ササダケカンバ群落、オオシラビソダケカンバ群落および高茎草原である。記録年代が違うが、タカサブロウ群とは場所的に離れており、また前記のように、タカサブロウ群は同じ付近に夏期に連続して生息していると考えられることから、別の群れと考えたほうがよさそうである(ここでは付近での最高峰奈良岳にちなんでナラダケ群と名付けることにする)。No.18もこれらと近いことから、同じ群れの可能性がある。

大笠山の群れ

No.27の記録は、1997年6月22日午前11時頃、大笠山山頂北東の斜面で、大畠谷源流部にあたる斜面の、雪渓上を移動するニホンザルを3頭発見している。富山県上平村境川ダムから大笠山への登山道(フカバラノオ)の標高1,550mの位置の北方400~500m離れたところにあたる。また目撃者によると、標高1,550~1,800m付近の登山道上で、人の親指大の太さで長さ7cmくらいの暗緑色の新しい糞が、5~6か所連続してあったとの情報である。糞はどういう訳か、すべて登山道に対して垂直に並んでいたのが不思議であったと報告されている。また、この目撃者は、同じ場所で別の登山者が、木から飛び降りる複数の生き物を見てクマと思って、恐ろしくなって下山したことを聞いている。これらは、いずれもニホンザルの情報と考えられ、付近にかなりの数の群れがいたと考えられる。なお、富山県の白山地域(平村、上平村)では、近年ニホンザルの群れの情報はなく(赤座、私信)、少なくとも昭和初期以降初めての群れの記録となる。しかし、夏期、冬期を通じて標高の低い境川流域等での群れの情報はなく、発見場所が石川県境に近いこともあり、この群れは石川県側から行動域をのばしている可能性が高い。場所的には雄谷の群れの一つとも考えることができるが、前記ナラダケ群あるいは、これら2つとは別の群れの可能性もある。

表 白山山系北部地域のニホンザルの記録

番号	年 月 日	場 所	標高m	個体数	内 容	記録者または文献等
No.1	1971年	成ヶ峰、二又川		数頭	登山者からの聞き取り	朝日新聞1971年10月2日
No.2	1971年頃	成ヶ峰から口三方岳付近		群れ	旧倉谷町住民から聞き取り（サルクラの滝付近に群れ）	林正一、山岳会グループ・ナカオ(1973)
No.3	1973年8月22日	高三郎山、クラコシ尾根	930		糞	上馬康生
No.4	1974年8月17日	高三郎山、シャクナゲ尾根	840	群れ	標高840m～940mに糞4か所	上馬康生
No.5	1976年5月28日	高三郎山、クラコシ尾根	1020	群れ	トダニ側から複数の叫び声	上馬康生
No.6	1976年6月16日	高三郎山、クラコシ尾根	1000		トダニ側から叫び声	上馬康生
No.7	1976年8月12日	高三郎山、クラコシ尾根	920	群れ	標高920mで木から飛び降りるサル目撃。標高920m～1000mに新しい糞9か所	上馬康生
No.8	1977年10月8日	犀川ダム上流、二又川出合	350	2	オトナ2頭を目撃	林 正一
No.9	1980年3月19日	高尾山	800	群れ	標高800m～840mにかけて群れ（約5頭分）の足跡	柴田文子
No.10	1981年3月8日	高尾山	800	群れ	標高800m～840mにかけて群れ（約5頭分）の足跡	柴田文子
No.11	1981年12月18日	高尾山	700	2	足跡（2頭分）	柴田文子
No.12	1981年5月20日	高三郎山、トダニ	1000	9	観察者に気づき、クラコシ尾根からトダニへ下り、トダニ左岸へ逃げる。少なくとも9頭目撃	上馬康生・野崎英吉
No.13	1983年4月13日	医王山、奥新保町地内	410	5	オトナ4頭、こども1頭を目撃。他にも同年3月1日、9日に雪の上に足跡（標高250～430m）	池田善英
No.14	1986年3月13日	医王山、奥新保町地内	250		カラスザンショウに新しい食痕	上馬康生
No.15	1990年12月8日	口三方岳	550	10	標高550m～600m付近で、少なくとも10頭目撃	沖野 仁
No.16	1991年4月26日	荒倉峰	570		古い糞（繊維質、冬季のもの）1個	上馬康生
No.17	1992年6月10日	奥三方山～奈良岳	1460	群れ	標高1550m、1620mにも、新しい糞と新しい食痕（ウド）	上馬康生
No.18	1992年6月10日	奈良岳～大笠山	1550		新しい糞	上馬康生
No.19	1992年6月11日	奈良岳～見越山	1590	1	オトナ1頭が富山県側から石川県側（二又川源流）へ逃げるように走るのを目撃。1520mに新しい糞	上馬康生
No.20	1992年秋	犀川ダム付近	350	1	首に黒いベルトをしたサル（発信器をつけたダンディと名付けられたサルと推定）が、ダム職員により発見される。	三原・野崎（1994）
No.21	1993年6月27日	犀滝上流の二又川源流	1250		シシウド、オニシモツケに新しい食痕。1400mにも食痕	上馬康生
No.22	1993年6月27日	奥三方山～奈良岳	1500		3か所に新しい糞	上馬康生
No.23	1993年7月4日	内尾谷	1100		シシウドに新しい食痕。1200mにも食痕	榎 典雅
No.24	1996年5月11日	高三郎山	740	群れ	ナガ尾根の標高740m～870mに新しい糞、連続5か所以上	上馬康生
No.25	1996年12月初旬	熊走町	190	40	集落付近に20～40頭の群れ。大根、柿の食害	北国新聞1996年12月17日
No.26	1996年12月31日	犀川ダム下流	270		古い大きな糞	滝澤ほか（1997）
No.27	1997年6月22日	大笠山	1550	群れ	大畠谷の上流斜面に3頭目撃。フカバラノオの登山道の標高1550m～1780mに新しい糞5～6か所。別の登山者も他に目撃。	東野登志子
No.28	1998年2月8日	犀川ダム下流	250	群れ	足跡、食痕	滝澤ほか（1998）
No.29	1998年2月11日	犀川ダム下流	300	42	拳原山北北西斜面の標高350m～500mに群れ目撃。同付近で、2月14日～15日に群れ追跡、群れの構成判明（アゲハラ群）。	滝澤ほか（1998）

アゲハラ群

No.25, 26, 28, 29は同じ群れであると考えられる。滝澤ほか(1998)は、42頭の構成内容を明らかにしており、この群れにアゲハラ群と名付けている。この群れの夏期の生息場所が、上流域の二又川や倉谷川沿いにあることが推定できるが、その実態、さらにはこの地域に何群いるのかなどを明らかにするには、今後の調査を待たねばならない。

その他の群れ

No.15については、12月の目撃情報であり、付近に群れの冬期の生息地がある可能性が高い。No.2との

関係などは不明であり、別の群れの可能性もある。時期的にアゲハラ群とは別であると考えられ、また、主要な尾根で隔てられ水系が違うことから、タカサブロウ群とも別の群れと考えられる。

No.23は発見年、時期ともにナラダケ群と同じであり、これが群れであるとする、ナラダケ群とは別の群れと推定できる。場所的には、瀬波川の群れ（ガラダニ群またはその分派群）である可能性が考えられるが、ガラダニ群の夏の行動域はまったく不明であり、記録不足で判断できない。

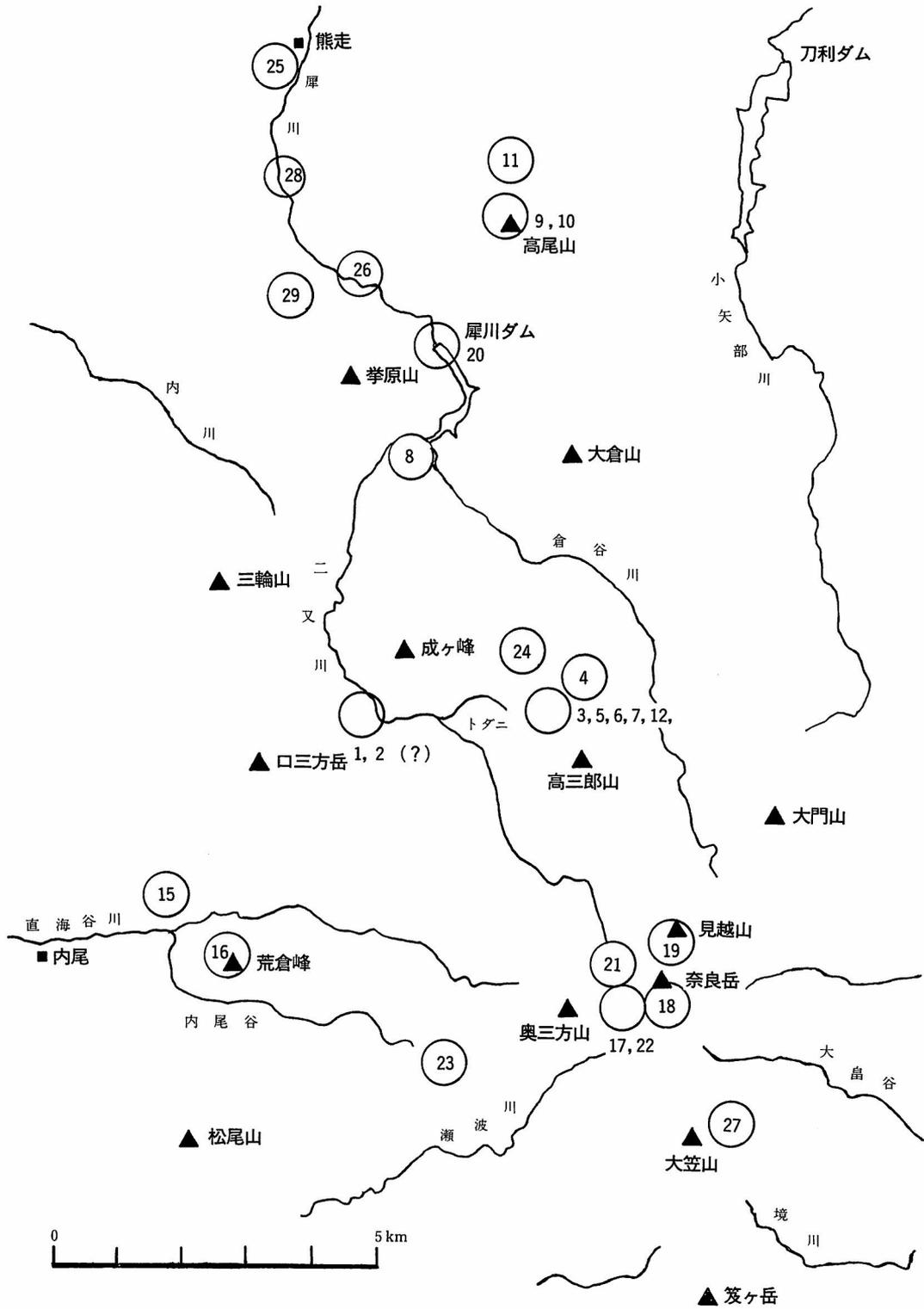


図2 白山山系北部地域のニホンザルの記録場所 (数字は表に同じ)

2 季節と標高との関係

記録年月と場所 (標高) が分かっている25例について、季節と標高の関係を示すと図3のようになる。それぞれ、群れであるか、単独ないし5頭以下または不明であるかの区別をした。また犀川水系と

それ以外とを区別した。一部の例には、群れのいた標高範囲で示したが、他の群れも実際には点ではなく標高差のある範囲にいると考えるべきである。この中には新しくない糞の記録は除いた。

犀川水系でみると、夏期に高三郎山の標高800

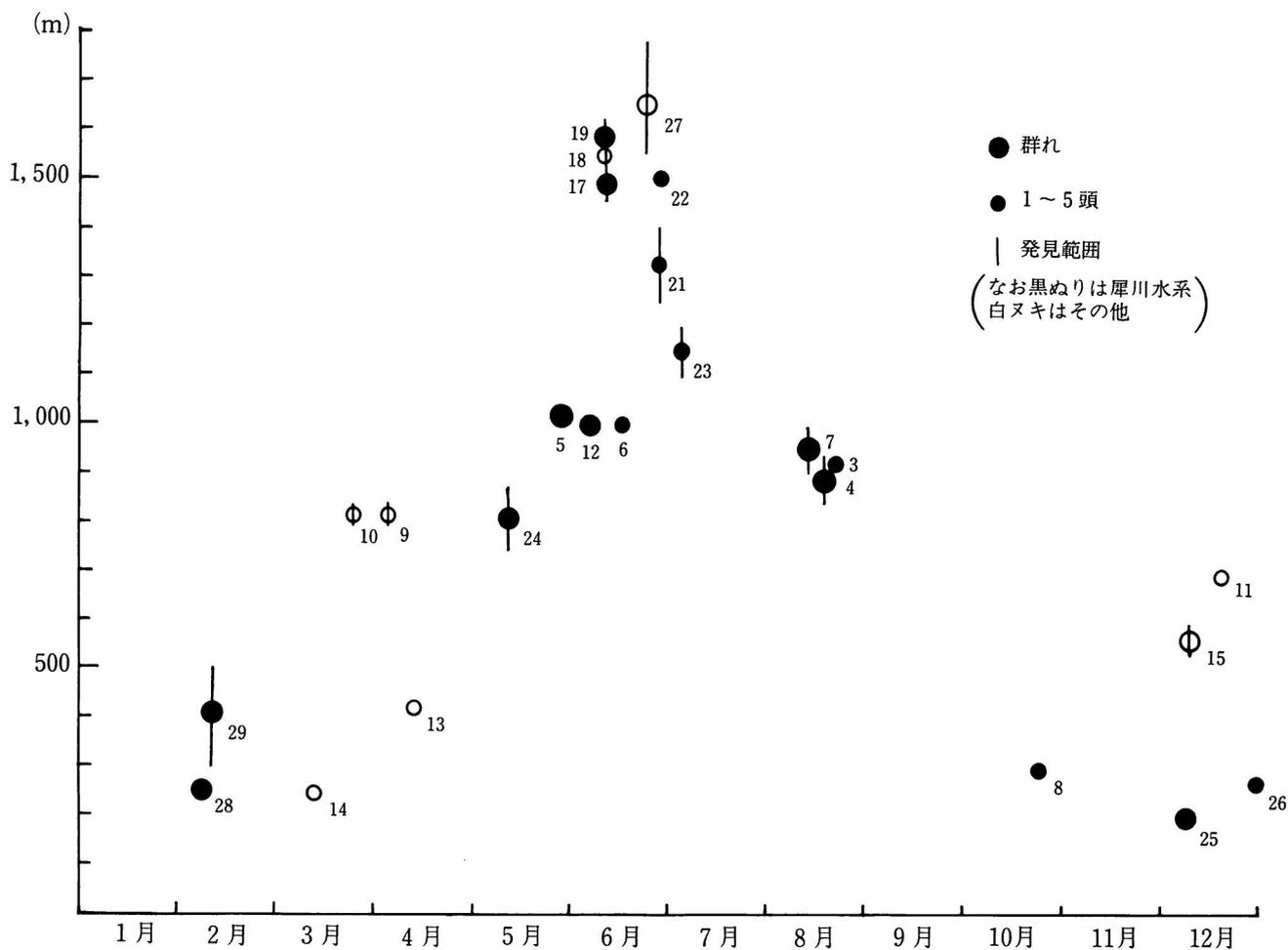


図3 白山山系北部地域のニホンザル記録の季節と標高との関係 (数字は表に同じ)

~1,000m 付近 (サカサブrow群) と、二又川源流域の標高1,250~1,600m 付近 (ナラダケ群) に群れがいることが推定できる。また冬期には、犀川ダム下流の標高200~500m に群れがいる。他の水系では、いずれも冬期に、口三方岳の標高550~600m に群れ、高尾山や医王山北部に小群が見つまっている。調査地域全域における、周年の定期的な調査ができていないので、十分な情報量とはいえないが、白山山系北部地域では、秋期から春期には標高800m 以下に、夏期には800m 以上に生息していることが分かる。

地形や植生等環境的にも共通することの多い、白山地域の尾添川水系や瀬波川水系の多くの群れが、夏期に標高の高いところへ移動し、冬期に谷間の標高の低いところへ下ってくることが分かっているが (水野1984, 上馬1992, など)、同様のことが白山山系北部地域のニホンザルの群れについてもいえることが分かった。

3 群れの増加

犀川、小矢部川、境川のそれぞれの上流には、昭和30年代まで小規模な集落があったが、当時すでに付近にはニホンザルの群れの情報はなかった。大正の終わり頃までは、犀川ダム上流の倉谷で毎年サル騒ぎがあり、住民がサル退治にかり出され、倉谷川沿いの谷で群れを捕ったという (北国新聞社1973)。

岩野 (1974) の報告にも、大正時代に倉谷および内尾にニホンザルが分布していることが示されている。その後、生き延びた少数の群れから、あるいは尾添川水系等から移動した小群が定着するなどして、少しずつ数を増やし、少なくとも1970年代初め頃には、二又川の成ヶ峰から口三方岳付近に群れが存在するようになったと考えられる。その後、個体数の増加や、群れの分裂等で数を増やしていったのではないかと推定される。

おわりに

最近の白山地域のニホンザルの動向としては、個体数、群れとも、かなり急速に増加しつつあり、以前には夏期にはいなかった低標高地の集落周辺にまで定着する群れが現れている。その原因として暖冬が続いていることによる、アカンボウや老齢個体の生き残りなどが考えられている(滝澤ほか, 1997)。そして、畑や水田等に被害をおよぼし、問題化している。白山山系北部地域でも、自然環境や人為環境は白山地域と類似しており、金沢市熊走町の低標高地に出現し畑に被害を出したことなどを含めて考えるなら、この地域でも個体数、群れの数とも、1970年代に比べると、はるかに増加しているとみるべきであろう。口三方岳に12月出現した群れも、今後、直海谷水系の各小集落に現れる可能性が十分あると考えなければならない。

地形や積雪などの状況から、白山山系北部地域は尾添川水系よりも調査は困難なところであるが、滝澤ほか(1998)も述べているように、今後、被害発生や個体群保護のことを考える上で、全域にわたる分布調査が必要であろう。

文 献

- 北国新聞社(1973) 犀奥のサル狩り. のとかが四季の野生, 394-395. 金沢.
- 岩野泰三(1974) ニホンザルの分布. にほんざる1 日本
の自然と日本人. 5-62. 雑誌にほんざる編集会議.
- 三原ゆかり・野崎英吉(1994) 白山麓におけるニホンザル
の行動域-タイコA1群と単独オスについて-. 石川県
白山自然保護センター研究報告, 第21集, 43-56.
- 水野昭憲(1984) 石川県のニホンザル分布. 石川県白山自
然保護センター研究報告, 第10集, 87-98.
- 山岳会グループ・ナカオ(1973) 動物. なかお・犀奥特集
号, 9.
- 山岳会グループ・ナカオ(1976) 動物ふるさと
の山, 103.
- 滝澤 均・伊沢紘生・志鷹敬三(1997) 石川県に生息する
ニホンザル個体群の現状. 石川県白山自然保護センター
研究報告, 第24集, 33-41.
- 滝澤 均・伊沢紘生・志鷹敬三(1998) 石川県内に生息す
る野生ニホンザル個体群の分布状況. 石川県白山自然保
護センター研究報告, 第25集, 29-39.
- 上馬康生(1992) 白山中宮道における夏期から秋期のニホ
ンザルの分布. 石川県白山自然保護センター研究報告,
第19集, 69-78.